

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 片 龍雨

本論文は、江戸後期を代表する歌舞伎作者である四世鶴屋南北（1755～1829）の作劇法を、作品に変化を与える工夫である「趣向」の立て方、作品の背景となる時代・人物などの類型的設定である「世界」の扱い方、また台帳やそれと密接な関係のある合巻の特徴等々、多方面から考察したものである。本論文の構成は、冒頭に序章を置き、続いて第一章「趣向の個性化」に「滑稽—『館結花行列（やのじむすびはなのぎょうれつ）』の台帳における添削—」等の三節、第二章「「世界」の利用」に「「世界」と緋い交ぜ」等の三節、第三章「台帳と戯作」に「台帳のト書きと戯作の地の文」等の三節を収め、その後に終章と補論「『例服曾我伊達染（しきせものそがのだてぞめ）』の台帳の原姿」を添える。

第一章は、南北の初期作品を取り上げ、その特徴である滑稽な趣向は、主筋との緊密な関係よりは独立した場面としての面白さを優先していること、また特定の作品・役者に限定されずに繰り返し使えるものであることを初めて指摘し、また筋を自在に運ぶために、小道具と役者の両方の機能を持つ「犬」を効果的に用いていることを明らかにする。

第二章は、複数の「世界」を複雑にからませ「緋い交ぜ」と称される南北の「世界」利用法を詳細に分析し、南北が各「世界」を一定の完結度のある「場面」へと細分化し、それを再構成することで、複数の筋が一つの筋へと融合しているような印象を与えていること、また曾我狂言の鬼王貧家の場に関して、南北は従来の鬼王の役割を赤沢十内に負わせ、鬼王を欲望のままに生きる同時代的な人物として新しく創造していることを指摘する。

第三章は、舞台上で演じられる劇としてではなく、台帳や合巻という文字化されたテキストとして南北作品を再考察し、役者に演技を指示するために書かれた詳細なト書きは登場人物の感情や心理にまで及び、結果として台帳を一つの読み物として読むことを可能にしていること等を明らかにする

また補論は、台帳原本の冊順の乱れから、従来誤ったままの順で翻刻されていた『例服曾我伊達染』を、小道具の移動を微細に検証することによって初めて本来の正しい順に復元した労作である。

本論文は、南北の多くの台帳原本を丁寧に読み込み、その「趣向」や「世界」の特性を詳細かつ具体的に明らかにした点に大きな価値がある。とりわけ、従来比較的手薄であった初期作品についての詳細な考察、文字化テキストという観点からの台帳の再検証は、意欲的な試みとして高く評価される。『東海道四谷怪談』や『桜姫東文章』等の南北の代表作の本格的な作品論など、今後の研究に期待される所もあるが、南北の作劇法を種々の資料と緻密な考察によって明らかにしたことは、南北研究に新たな一頁を付け加えるものである。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。